

『夜のノートルダム』に見られる美川きよの生き方

The Way of Life of Kiyō Mikawa as Seen in *Notre-Dame de Paris at Night*

(1991年4月3日受理)

清水 教子
Noriko Shimizu

Key words: 生き方, 縁, 運命

一 美川きよとの出会い

美川きよとの出会いは、第三者によって与えられた偶然の機会であり、1989（平成1）年7月のことであった。ある出版社から『現代女性文学辞典』の分担執筆を突然依頼され、私の分担する6名（九条武子・美川きよ・平林英子・増田れい子・桐島洋子・杉本章子）のうちのひとりが、美川きよであった。それまでは、名前すら知らない作家であったが、彼女の自伝的長編（原稿600枚）である『夜のノートルダム』を読み終えたとき、切ないまでに美しい夫婦愛に打ちのめされた。また、絵画鑑賞の好きな私は、きよの夫鳥海青児が画家であることにも興味をもった。ちなみに、鳥海の絵は、この3月26日に開館した平塚市美術館に多数収蔵されている。

二 主題と研究方法

生き方を主題として選んだのは、女性の生き方に関心があるからであり、不惑を過ぎてもなお自己の生き方に迷いを感じつつ暮らしている私を、今一度見つめ直したかったからでもある。

研究方法としては、妻子ある作家Aとの別れを決意するところまでを描いた長編小説『女流作家』の主人公藤木葉子（作者自身をモデルにしたと考えられる）の生き方と、鳥海と結婚してからのことを主として書いてある『夜のノートルダム』に見られる作者自身の生き方とを比較してみることにする。別の方法としては、作者と同時代の作家である宇野千代や佐多稲子の生き方と比較することも考えられるが、三者の全作品を読んでいない現時点では無理なことである。

三 美川きよとその時代

1900（明治33）年9月28日に横浜市で生まれた美川きよは、今年91歳を迎える。本名は鳥海清子^{とりうみ}。処女作は1926（大正15）年8月「三田文学」に発表した『デリケート時代』で、「三田文学」の編集委員の一人水上瀧太郎に絶賛された。その後数編を発表しただけで創作を中断したが、1930（昭和5）年8月「三田文学」に『父の恋愛』を書いて再登場した。最初の結婚に破れ、妻子あるAと別れ、1939（昭和

14) 年1月に鳥海青児と結婚した。きよは38歳、鳥海は37歳で初婚であった。夫の鳥海は1902(明治35)年3月4日平塚市に生まれ、1972(昭和47)年6月11日に70歳で亡くなっている。本名は、^{とりうみ}鳥海正夫。1933(昭和8)年に春陽会会員となり、1943(昭和18)年には独立美術協会会員となった異色の洋画家で、代表作に「闘牛」「信州の島」「飯倉風景」「ピカドール」などがある。

新婚生活は、先述のように1939年、東京の麴町区六番町一の一で始まった。きよは1942(昭和17)年、博文館から母親の代表として選ばれて日中戦争の取材で中国へ行ったり、新聞社から派遣された女性作家5人のうちの一人としてジャワに取材に行ったりした。1945(昭和20)年1月15日には、鎌倉雪の下に引っ越している。終戦は、疎開先の神奈川県伊勢原の農村で迎えた。敗戦は、二人に未来への不安と絶望を痛いほどに感じさせた。鳥海は43歳、きよは44歳であった。何か月ぶりかで疎開先から鎌倉雪の下に帰って来た鳥海は、寝ても覚めてもかぼちゃのことしか考えておらず、そのかぼちゃを題材に大胆な構図と表現方法でそれ以前の作風から完全に脱皮した。

鳥海が新しい作風へと脱皮するために苦しんでいたころ、きよの方は、三好達治もかつて苦しんだことがあるという同じ神経性心臓病のために、原稿が一枚も書けなくなっていた。その病根は、きよ自身が「私はペンを捨てることを考えはじめていたのだ。私は、彼に金の苦勞をさせぬために、懸命に書き稼ぎまくってきたが、その是非の壁に直面していたのだ。」⁴⁾と書いている。

1952(昭和27)年、二人は家を建てて東京の麻布飯倉片町に移る。鳥海は、ソ連大使館の鬱蒼とした森が借景になるこの飯倉の土地が大変気に入っていた。鳥海50歳、きよ51歳のときのことである。きよは病気が直ったものの、小説は遂に書かずじまいで、随筆や雑文、新聞社からの「人生案内」の仕事、講演や座談会などの依頼で生活のメドが立つようになった。

鳥海は近く前の年、1971(昭和46)年6月、画業五十年記念「鳥海青児展」(大阪梅田の阪神百貨店で開催)を自分の眼で見ることができ、「俺のして来たことに狂いがなかったのも、安心したよ⁵⁾」と言って満足気であった。死の直前、入院先できよが「古女房の顔でも見てったら⁶⁾！」と言ったとたんに、「満面に何ともいいようのない美しい笑いがあふれこぼれんばかりに浮んだ。」⁷⁾という。こうして鳥海は事切れた。

夫亡き後、たまらなく寂しい生と死の彷徨の只中にあったきよに、自伝を書くことを勧め、2年間で書き終えた600枚の原稿に眼を通してくれたのは、40年以上の長きにわたって女の友情を示してくれている宇野千代であった。この長編の自伝が、『夜のノートルダム』である。

なお、きよが先述のように「遂に小説は書かずじまいだった⁸⁾」というのは、1977(昭和52)年7月に出版された『宇野千代全集』第5巻の月報1(中央公論社)に「三十年近く文壇に御無沙汰した私に、作家宇野千代を語る資格はないが、(以下省略)」とあることから裏付けられる。

主な作品としては、先述の外に『恐しき幸福』(1935年)・『女流作家』(1938年)・『白と赤』(1940年)・『一日一花』(1943年)、原爆文学「あの日のこと⁹⁾」、江戸時代の画家夫妻を扱った時代物「大雅と玉瀾」(1948年)、自伝『夜のノートルダム』(1978年)などがある。

四 『女流作家』とその時代

長編小説『女流作家』は、『恐しき幸福』(1935年)の後編を成すもので、「三田文学」に1938(昭和13)年1月号から12月号まで12回にわたって連載された。単行本としては、翌年1939(昭和14)年に中央公

論社から出版された。1926（大正15）年4月に復活した第三次「三田文学」は、和木清三郎が編集責任者で、水上瀧太郎が久保田万太郎命名の精神的主幹であった。水上邸で毎月第二水曜日の夜行われた水曜会に、美川きよや今井達夫は参加していたが、1935（昭和10）年11月13日の集まりが最後となった。また、水上瀧太郎（1887年～1940年）は、1933（昭和8）年11月21日に編集委員も精神的な主幹も辞退している。「貝殻追放」によれば、美川きよは水上に「ひいき」されていた一人である¹⁰⁾。

ところで、文学史的に眺めると、人道主義の白樺派、理知主義の新思潮派、雑誌「種蒔く人」の創刊（1921年2月）によるプロレタリア文学、新感覚派などが主な文学潮流であった大正文学は、1927（昭和2）年7月24日の芥川龍之介の自殺で終わったと考えられている。昭和10年代の文学は、思想の転向を表明した旧プロレタリア文学作家の手になる転向文学、文芸雑誌「文学界」（1933年10月創刊）、亀井勝一郎らの日本浪漫派が主流であった。1935（昭和10）年には、芥川賞（純文学）と直木賞（大衆文学）が菊地寛によって創設された。第1回芥川賞は石川達三の『蒼氓』であり、第1回直木賞は川口松太郎の『鶴八鶴次郎』であった。三田文学賞は同じく1935年、芥川賞の制定が契機となり、「三田文学」の同人須川光一（横浜の沖仲仕の会社社長）が出資を申し出て成立した。第1回三田文学賞は石坂洋次郎の『若い人』、第2回は今井達夫の『青い鳥を探す方法』、第3回は南川潤の『掌の性』、それに美川きよの『女流作家』であった。そのとき、きよは38歳であった。

『女流作家』の発表された1938（昭和13）年前後、他の女性作家の作品としては、田村俊子の『男を殺す女たち』『カリホルニア物語』（1938年、54歳）、野上彌生子の『黒い行列』（『迷路』第一部原形）（1936年、51歳）、岡本かの子の『巴里祭』『老妓抄』（1938年、49歳）、宇野千代の『文體』（雑誌）（1938年、41歳）、宮本百合子の『雑沓』『今日の文学の鳥瞰図』（1937年、38歳）、林芙美子の『林芙美子長篇集』全8巻（1938年、35歳）、佐多稲子の『裸足の娘』（1940年、36歳）、平林たい子の『羽織』『エルドラド明るし』（1937年、32歳）などがある。また、女性評論家としては「青鞥」を創刊した（1911年）平塚らいてう（1886～1971）、女性解放運動に身を挺した神近市子（1888～1981）、平塚らいてう・与謝野晶子と母性保護論争をした山川菊栄（1890～1980）などが健在であった。

一方、日本史的に眺めると、昭和10年代の日本社会は、1935（昭和10）年10月15日、美濃部達吉の天皇機関説を政府が除去する、1936（昭和11）年2月26日、2.26事件、1937（昭和12）年7月7日、盧溝橋事件が起こり日中戦争が始まる、1938（昭和13）年4月1日、国家総動員法が公布される、1940（昭和15）年、日独伊三国同盟が締結される、1941（昭和16）年12月8日、ハワイの真珠湾を攻撃し太平洋戦争が始まる、1944（昭和19）年10月24日、レイテ沖海戦が始まる、といった具合で、戦争へ向かってまっしぐらの時代であった。

このような文学史的、日本史的な時代背景の下で、『女流作家』は執筆されたのである。

五 『夜のノートルダム』とその時代

自伝『夜のノートルダム』は先述（三 美川きよとその時代）のように、夫である鳥海青児が1972（昭和47）年6月11日に70歳で死去してから、2年の歳月をかけて執筆され、1978（昭和53）年4月に初版発行された。鳥海が没したとき、きよは72歳であった。妻子あるAと別れ、1939（昭和14）年1月に結婚してから33年の長きにわたる鳥海との生活を回想したものである。

1978年と言えば、宮本輝・高城修三・高橋三千綱・高橋揆一郎が芥川賞を受賞し、8月12日に日中平

和友好条約が調印された年である。

六 『女流作家』の概要

藤木葉子と和田三吉の出会い、彼女が24歳、彼が30歳のときであった。当時純文学の新進作家として知られて来た和田の所に、葉子が弟子入りして、二人は恋愛関係になった。知り合って5年めぐらいに、葉子は、既に妻子のある和田と一緒に家を持った。二人の関係は10年を過ぎていった。その間、和田は二つの家計費を稼ぐために、葉子の大嫌いな大衆文学の作家へと変わっていった。葉子は、彼女の文学的才能を高く評価して育ててくれた和田のお蔭で、一人前の作家に成長した。しかし葉子は、妻がいるために葉子に何かと嘘をついてしまう和田に、妻の良子や娘の和子に依然として気兼ねをしななければならない生活に、段段耐えられなくなってきていた。葉子は心が空虚になり、和田への愛が少しずつ薄らいできた。そんな折、ふっと浮かび出てくる一人の男の顔があった。葉子はその男、千葉雄作を愛し始めていた。千葉は、名譽・地位・人気などの華やかなものに憧れる和田と最も対蹠的な男であった。

和田との古い愛に引きずられるのか、千葉との新しい愛に飛び込んでいくのか。葉子は二つの間で揺れ動いていた。自分の理想とする文学観に基づいて、いい作品を描きたい。そのためには？

作家小野千夜が指摘したように、葉子の作家としての眼には、まだ別れていない男の欠点をもあばき出すという、容赦や慈悲の無い、好奇心の強い、残酷性があった。葉子は、ありのままの自分を読者の前にさらけ出そうという捨て身な覚悟を決めてから、不思議と作品が売れ始めた。和田からの送金を待たなくても、葉子は生活できる目安がついた。

葉子は和田への手紙の中で、良い作品を書くためには、三角関係ではない正しい生活が必要なこと、「私は私の文学の為に、あなたから去るのです。」¹¹⁾と声明して、和田との15年にわたる生活に終止符を打った。

以上のように『女流作家』は、葉子という一人の女性が自分の理想とする作家に成長していく過程、よい作品を書くには自分の望ましい生活が必要で、そのために和田と別れる決心をするまでに至る過程、が克明に描かれた長編小説である。

『女流作家』はフィクションではあるが、葉子の考え方や生き方には、作者美川きよのそれらが投影していると考えられる。そのことは、きよ自身が「も一人の男との不可解な仲を裁こうとして、迷いの末に取り組んだ長編」¹²⁾、「石坂洋次郎が二年間『若い人』を連載して三田文学賞を取った。それに刺激された訳ではないが、無理に仕事に縛りつけぬと書き上げる度胸がにぶると思って、編集者に頼んで長編小説を書かせて貰い、自分を自分で解剖する外科室の場所に使用したのであった」¹³⁾と述べていることから明らかである。

では、葉子の相手の和田三吉（作者の言う「も一人の男」）とは誰であるのか、それは、作品論的に関係のないことだし、『女流作家』でも『夜のノートルダム』でも、どちらかといえば損な役割を演じさせられているが、当時の大衆文芸随一の流行作家小島政二郎の影を意識しないわけにはいかない。それは、「藤木葉子が和田と知ったのは二十四の年だった。その頃漸く新進作家としてみとめられ出した和田三吉は三十歳」¹⁴⁾とある二人の年齢差が6歳であること（美川は1900年生まれ、小島は1894年生まれで6歳年長）、¹⁵⁾「僕はあした歸らなければならないんだが……夕方から××賞の委員会だから。」とある××賞の選考委員であること（小島は、1935年設定の芥川賞・直木賞両方の選考委員に加わっていること）、美川

も小島も「三田文学」に投稿し、小島は「三田文学」の編集委員でもあったが、二人とも水上邸での水曜会に出席していたこと、『夜のノートルダム』に登場する今井達夫や和木清三郎の口ぶりなどから推定できる。

なお、小野千夜とは、美川きよと長年にわたる女の友情を保ち続けている作家、宇野千代（1987年～、宇野は美川より3歳年長）のことである。

七 『夜のノートルダム』の概要

自伝『夜のノートルダム』は、全部で23の内容に分けてある。最初の「霊前祭」は、鳥海が1972（昭和47）年6月11日に70歳で没してから四か月近く経った10月4日の記述から始まっている。72歳のきよは、鳥海の仕事の整理を全うしなくてはならない最後の義務が山積みしており、それを果たすために生きながらえることができたのであるという。

2番目「夜のノートルダム」では、鳥海と結婚するきっかけとなった彼の厚塗りの板絵「夜のノートルダム」と出会い、その油絵に魅せられて、初めて自分の好きな絵を買い求めたことが述べられている。

3・4・5の三つでは、先述の『女流作家』に登場する和田三吉、『夜のノートルダム』ではA、と別れて、一人息子英吾を連れて、初婚の鳥海と結婚するに至るまでを述べている。

6番目「六番館時代」から20番目「私のヨーロッパ旅行」までの15の章では、結婚後の二人にとって特に思い出深いものが取り上げられている。6番目「六番館時代」は、1939（昭和14）年1月15日から東京の麴町区六番町一の五に住んでいた新婚時代の出来事、10番目「鎌倉雪の下時代」は、1945（昭和20）年1月15日に鎌倉雪の下に転居してからのこと、18番目「飯倉の家」は、1952（昭和27）年に東京の麻布飯倉片町の新築に移ってからのことで、きよは「水上瀧太郎の十三回忌に当るその年（筆者注：1952年）、飯倉に私たちは安住の地を得、生活を定着することが叶えられたのだ。戦争という暗い背景は完全になくなって¹⁶⁾いた。」と述べている。

20番目「私のヨーロッパ旅行」では、きよがああ板っぺらの4号の「夜のノートルダム」と出会ってから30年余り経った1971（昭和46）年5月、パリで初めて実物のノートルダム寺院を訪れたこと、汚れを洗い落としてしまった外観にはがっかりしたが、堂内に立ちつくしたときには幸福の喜悦に震えたということ、が語られている。

最後の三つは再び鳥海に焦点を当て、鳥海の入院、臨終で締めくくってある。死の直前に鳥海が笑ってくれたことに対し、「私はまばたきせず彼の手を握りしめた。眼と眼の契りといいたい夫婦の最後の饗宴の一瞬¹⁷⁾だ。」ときよは表現している。

また、二人の交友関係がどんなに多彩であったかは、画家仲間、鳥海の出身校である藤沢中学時代以来の友人、「三田文学」関係者や他の文学者、小唄の師匠木村万春の関係者など、全部で115人以上を数えあげることができる点からもわかる。中でも、鳥海ときよの共通の友人である小説家今井達夫（1904～、きよより4歳下で鳥海より2歳下）の名前は、33回にもわたって出現しており、一番の親友であることが明らかである。

八 『女流作家』に見られる藤木葉子の生き方

藤木葉子の生き方は、芸術観・文学観、人間観、恋愛観・結婚観、性格などと密接に絡み合っており、それらを把握しながら考察する。

葉子は文学が一番好きで、芸術はまして文学だけは一代という気が強く、大衆小説が大嫌いで、純粋な芸術家の風格のある文、小説の中で生きていく声の聞こえるような小説、小説の中で骨の音が聞こえるような小説を書きたいと願った。また、文学則生活であり、文学を人間の男を愛する代わりに愛したい、男との中の子を産む代わりによい小説を自分の中から産みたいと考えていた。

葉子は酔っ払いが大嫌いで、芸術に酔っている人は好きである。小野千夜のように、他人の前でも、作品でも、人生においても、恋愛においても、自由にあからさまに振る舞える人を尊敬しており、彼女の作品のように不思議な魅力のある人が好きである。

葉子は、和田が小説家で無かったならば恋愛しなかった気がするし、10年を越す三角関係の中で、和田の心を信じる謙虚な素直さが消え、和田を疑惑する癖がついてしまったことに嫌気を感じるようになった。和田との恋愛に本気でぶつかり、女の一生を賭けたのに、葉子を一時のがれにごまかし、自分の生活を変えることをのがれるその男の妥協的な弱さ、意志の不徹底を憎んだ。そんな男に打ち込んだ自分が情けなくて苦しい。また、名誉・地位・人気など世俗的なものへの欲求が強い和田を哀れみ、和田と最も対称的な男である千葉に魅力を感じ始める。

東京の下町に育った葉子は、髪を髷に結って正月を迎える古風な習慣が好きで、和田の妻である芳子の不幸に対し、せめてものつぐないがしたいと殊勝な気になる人情を持ち合わせている。恋愛には夢中になりやすく、浮気のできる器用さがない。多情多恨で苦しむことが多かったが、自己に対しても物事の見方についても、自己本位に考える癖が減って来た。

葉子にとって二人の男との交渉は耐えがたく、千葉と逢い始めることは和田との別離を意味していた。

葉子は、小説と料理、仕事と家庭、を両立させたいと願っていたが、現実には決して両立しない。子どもは欲しいが、産んでは自分の仕事の方は駄目になる気がし、一生命のある間勉強すれば、ものになるかも知れない仕事の方が、自分の意志で左右される事だけに確かな気がして来ていた。30代後半になった今、恋愛よりも仕事に賭ける情熱の方が強くなっていった。

葉子は下腹部の手術中、自分には本質的に仕事に執着する魂のあることを発見した。仕事の上で、経済的に和田に頼らなくてもやっていける目安もついた。葉子は、自分の書きたいと思うもの、平和な小説、何気ない小説、暖かみのある小説が書けるような心の豊かさ、心の静けさを求めた。それには、この間違った三人の形態（妻の芳子—和田—恋人の葉子）を解消する以外に道はないと確信した。

葉子は、自分の望むよい作品を書きたいために、自分の文学のために、和田から去ったのである。

上述の葉子の生き方を簡単にまとめてみると、自分の理想とする文学観に基づいて、自分の望むよい作品を書きたいために、小説家としての育ての親でもあり恋人でもあった和田との15年にわたる生活を断ち切って、千葉との新しい愛に踏み出していこうとしていると言える。

九 『夜のノートルダム』に見られる美川きよの生き方

1. Aとの関係におけるきよの生き方

妻子ある男Aとの関係におけるきよの生き方は、先述の小説『女流作家』の葉子の生き方と基本的に同じである。何かと嘘をつかざるを得ないAに対し、きよは「私の心をもてあそぶのは我慢ですむ。しかし、母や子の心をもてあそばないでくれ¹⁸⁾」と泣いてしまう。Aが海軍から日中戦争に派遣される時、「Aの妻がハンカチで眼をおさえている姿が、無性にいじらしく眺められ、そして平然としている自分を、自分で嘲笑った」きよには、「もはやAにかかずらう一かけらの愛情も失せていた。」²⁰⁾そして1939(昭和13)年のクリスマスイブの夜、きよは「残酷な振舞い、言葉で、一人の男に斬るに似た行動²¹⁾」をしてAとの縁を断ち切った。翌日のクリスマスの日、Aには二度と逢いたくなくて家出をし、鳥海と結ばれることになる。その後、水上瀧太郎の十三回忌に当たる1952(昭和27)年、法事の席で小泉信三(1888~1966年、経済学者・随筆家)に挨拶を済ませたきよは、順順に上座から旧知の親しい一人一人と短い言葉をかかわした。Aがそこに並んでいるのに気づいたが、何の感動もなく、無視してとぼしてしまった。そして、自分の図太さにもぎょっとした。十三年の歳月は、人間をこうも変えるものなのか²²⁾という感慨を吐いている。

きよ自身と鳥海のために、A及びその妻子のためにも、Aを鋭く切り捨ててしまったきよの生き方に潔さを感じ、心から拍手を送りたい。

2. 鳥海と結婚してから死別するまでのきよの生き方

次に、1939(昭和14)年に結婚し(きよ38歳、鳥海37歳)てから、1972(昭和47)年に鳥海と死別するまでの33年間のきよの生き方は、鳥海の生き方、夫婦の在り方、運命・縁²³⁾と深く係わっている。特に、夫婦はお互いにお互いの影響を受けやすいと思うが、きよの場合は、鳥海がきよに与えた影響の方が遙かに大きい。或いは、鳥海の生き方にきよが引っ張られたと言い換えてもよい。

結婚前、Aと鳥海のどちらを選ぶべきかと迷っていたとき、「そんな自分の仕事と、私自身の生き方に嫌気がさして²³⁾いたとき、きよは「あの貧しい画室と彼の生き方、仕事への情熱の秘密を学び盗み、真似したくなった²⁴⁾」こと。きよが妊娠した(39歳)とき、「墮すんだな、絵描きは一代限りだ。鳥海家が絶えようがどうなるうが、俺の知ったことじゃない……。それに俺は溺愛する悪癖を多分に持っている。もし、男の子だったら英坊(=きよの一人息子、英吾のこと)が可哀想だ……。英吾のことを、そこまで考慮してくれるのかと、私は心の中で手を合せた²⁵⁾」こと、再び妊娠した(41歳)とき、「絵描きは一代だ。子供はいらん。絵描きは出来損ないみたいなものだ。医者や学者は遺伝するが、絵描きにそれは望めないと笑いとぼした、彼の捨身な強引な生き方に負けた²⁶⁾」こと、つまり、「彼と結婚して、二人の子を墮す非道をさえあえてし²⁷⁾」たのは、鳥海の生き方に魅せられ、彼の強引な生き方に引っ張られたからである。

また、きよの生き方を明確に決定したのは、鳥海との結婚であった。そのことは、「もし、あの『夜のノートルダム』に魅せられなかったならば、私の一生の岐路、仕事一本槍か結婚かと、考えあぐねていた当時の私に、あの勇氣と捨身の覚悟は生まれず、心を決することは不可能だったろう²⁸⁾」という箇所、「日本の男は『愛する』という表現を口にするのをひどく嫌う。彼もとうとう一度も口にはしなかった。が、彼が女の中から、私を妻に選んでくれたことだけで、私は幸福な一生を得た。私の一番嫌いな退屈

を知らぬ半生を過せた²⁹⁾』という所に明白である。鳥海との結婚は、きよにとって幸福であった。

3. 鳥海の生き方ときよ

次に、鳥海の生き方の基本について再認識してみよう。鳥海に求婚されたとき、「あなたは初婚よ。私にはその資格がない³⁰⁾」と答えたきよに対して、鳥海は「僕は、ありふれた結婚はしたくない。仕事と仕事をぶっつけあって、お互いの人格を高めて行きたい夢があるんだ。甘い夢と笑うかも知れんが³¹⁾……」と言っている。鳥海は、きよに仕事を捨てよとは全然言っておらず、むしろ、仕事の続行に賛成しているのである。お互いの仕事を最優先するが故に、先述のように子供はいらないとまで言った。そういう強引な鳥海の生き方にきよは負けたのであって、最初の妊娠のとき、「私とても、幸運にも、とみに多忙になる自分の仕事と、家庭の現状を維持するのが精一杯で、子供を産んで私が原稿を書く時間を失ったならば、共倒れになりかねぬと、腹をきめた³²⁾」のは、やはり仕事優先である。二度目の妊娠のときは、「墮さずば今度は私の生命がもたぬと覚悟して³³⁾」とあって、母体優先ではあるが、鳥海の子供はいらない(仕事に専念したい)という根本の考え方が強く影響している。

きよにしても鳥海にしても、その生き方は、両立が困難な場合、彼等にとってより優先する一つを選び取るというものである。理想は両立することであるが、現実には二者択一にならざるを得ない。きよは、「岐路に立たされると、一つの道を選び、一つを捨てて来たのだ³⁴⁾」と明言している。この生き方は二人に限らず、人間の普遍的な一つの生き方であると言える。

なお、画家としての鳥海が目指したものは、「日本の風景を油絵に生かすこと³⁵⁾」、「誰もがやらないこと、誰もが描かないものを創り出すのが、彼の一生を賭けての仕事、追究³⁶⁾」であって、「それ故にこそ、一生の大半を報いられずとも生きることに堪えぬいた³⁷⁾」のである。鳥海は、所期の目的を見事に果たすことができた。

4. 夫婦の在り方ときよの生き方

次に、夫婦の在り方できよの生き方に関わってきたのは、共稼ぎ夫婦の難所に立ち往生していたことである。「芸術家の夫婦というものは、一体どんな形式で平和に家庭を維持し守らなければならないのだろうか³⁸⁾」、「鳥海のこと、することは、常人とは遠い。それだからこそ絵に専心させたくなり、金銭の苦勞はさせたくない。金を得るには、外に仕事場を求めて家庭も夫も顧みない女にならざるを得ぬ。これでいいのだろうか？ 外国には両立させている女性がいるが、私にはその体力が不足だ³⁹⁾」と、きよは色々と考え込んだ。そんなとき、ふっと日本の昔(江戸時代)の女でも、絵を描きながら睦まじく終わりを全うした玉瀾(1727年～1784年)がいたことを思い出し、この稀なる画家夫婦(夫は池大雅、1723年～1776年)の在り方をお手本にしたいと考えた。そんな関心の下で書いたのが、「大雅と玉瀾」(1948年)である。

上記の問題は、「作家修業を断つ以外に道はなかった⁴⁰⁾」、「今度は自分を斬る番だと自嘲した⁴¹⁾」、「私は病気を口実に、一切の原稿の依頼を断った⁴²⁾」、「これからはきれいさっぱり好い奥さんになってあげる⁴³⁾」などから明らかなように、仕事ではなくて鳥海に対する内助の功の方を選び取ったことによって解決された。内助の功を優先させることを決意したきよは、以後、遂に小説は書かずじまいで、随筆や雑文で生活のメドを立てていったのである。作家としての修業は断ったのである。

5. 運命・縁^{えにし}ときよの生き方

次に、生き方という自己の主体性を強く意識するが、自分の意志とは無関係といえる運命・縁^{えにし}といったものもきよの生き方に関わっていたことを述べてみたい。

貧乏画家鳥海青児と結ばれる運命にあったことは、きよと渡辺華山(江戸末期の洋学者・南画家、1793年～1841年)の出会いに見られる。「小学校時代から絵が好きというより、絵ばかり描いていた⁴⁴⁾」きよは、小学校5年生の時に泣きじゃくりながら「渡辺華山」を通読した。「子供心に不思議なくらいに強烈、鮮明な感動だった⁴⁵⁾」ことを覚えている。「その時、既に、私の運命、売れぬ不幸な絵描きの妻になる未来は約束されていたのだ……。それは、夫を失った七十二歳の今の私が浮世から降りて初めていえることであり、一寸先の明日の出来事を予見することは、不可能なのだ⁴⁶⁾」という箇所である。

また、Aに別れを告げて家出をしたきよと鳥海との偶然の出会い、1938(昭和13)年12月のクリスマスの日のことである。当座のお金が必要なきよは、長編小説『女流作家』で第3回三田文学賞を受賞したその賞金を貰いに、当時銀座の交詢社の二階にあった「三田文学」の編集室に、和木清三郎を尋ねた。そして、交詢社の東側の階段を駆け降りて明るいう往來に走り出たとたん、背後から声を投げられた。鳥海だったのである。きよは、「それが鳥海だとたしかめた時に、どうして、この人がここにいるのかしら? どうして通りかかったのだろうと、気味悪いものすら感じた。彼は朝寝坊で有名だ⁴⁷⁾」、「鳥海との偶然な、まるで約束されたような出会いが、もう大丈夫だという勇気を抱かせた⁴⁸⁾」、「番町から新橋駅への道を、同時刻に一人の男とはすれ違い、一人の男とは出会うこの不思議さに、人間以外の何かの力を感じずにはいられなかった⁴⁹⁾」と回想している。正に運命的な出会いであった。

また、人との縁^{えにし}については、次に二つ記しておく。一つは宮田耕三に関することであり、他の一つは中井潤に関することである。

鳥海の死(1972年6月11日)の前日、宮田耕三がベルギーから飛行機で日本まで見舞いに来てくれることになった。四つの時に父を失った鳥海にとって、宮田は慈父のような存在であり、博愛主義の喜びを教えてくれた恩人でもある貿易商人であった。宮田の来日の知らせに対して、きよは、「私は日本語の中で『縁^{えにし}』という字が一番好きだ。奇蹟に等しい縁の吉報が入った⁵⁰⁾」と記してはしゃいでいる。

きよと鳥海に沢山の友人・知人がいたことは、先述した(七 『夜のノートルダムの概要』)が、友人・知人も縁である。中でも、鳥海が一目置いていた友人に、中井淳(大学教授、友人仲間では中井オヤジと呼ぶ)がいる。中井がある時ポツリと、「鳥海のパトロンは、奥さんだけだ⁵¹⁾」と言ったのに対して、きよはこの有り難い言葉にふいと涙ぐんだとある。そんなエピソードのある中井を指して、「この友人の影響にあずかる所が多い。友は選ぶべし。類は友を呼ぶ。多くの良き友に恵まれた鳥海の人生は、それだけで幸福であった。それだけが楽しかったといっても過言でない。おこぼれ頂戴で、私の人生も豊富。空想力の貧しい私が小説のモチーフに事欠かなかったのも、その賜⁵²⁾」と記している。

きよと鳥海、二人を取り巻く多くの友人・知人、との縁は羨ましいほどであり、きよの人生に至福をもたらしたのである。

6. 鳥海亡き後のきよの生き方

最後に、鳥海亡き(1972年6月11日没)後のきよの生き方は、落胆や悲嘆に耐えて生きていこうとする気魄、「一つの仕事に取り組むあの遠い二十年も昔の作家精神⁵³⁾」とでもいうような自他に厳しいもの、を感じさせる。それは、鳥海没後四か月近く経った頃の10月5日、床の間に掲げたきよの大好きな岳翁

(室町後期の画僧)の「靈照女」の一軸に対して、「籠を持った半身像の女性の、あの厳しい^{つらがま}面構えが大好きなのです。しばらくはこの生き方を手本にしたいのです。あなたには今のこの心境が解っていただけだと思います⁵⁴⁾」と、今は亡き鳥海に語りかけているところに明白に現れている。

鳥海の仕事の整理を完了するために、きよは必死で生き抜こうとしているのである。

十 結 論

鳥海と結婚する前、妻子あるAと恋人関係にあった頃の美川きよの生き方は、長編小説『女流作家』における藤木葉子の生き方と基本的に同じである。小説と料理(仕事と家庭)の両立を理想としていたが、現実には不可能であることを知った。理想とする文学観に基づいて、よい作品を書く一人前の作家として成長し続けるためには、三角関係を解消して正しい生活に戻らなければならない。自分の文学のために、妻子あるAとの縁を断ち切ってしまったのである。それと同時に、和田三吉(A=小島政二郎)との古い愛を捨て、千葉雄作(鳥海青児)との新しい愛を選んだのである。

厚塗りの油絵「夜のノートルダム」と出会い、その絵の作者、世俗的な名声を嫌って絵と情熱的に取り組む生き方をしている鳥海に魅せられて、きよは結婚する。結婚後のきよの生き方は、仕事と家庭の両立を目指していたが、不可能と知り、作家修業をあきらめて、内助の功の方を選んだのである。

理想の作家になるためにAとの縁を断ち切ったこと(恋人よりも文学の方を選んだこと)、鳥海と結婚したこと(仕事一本槍か結婚かで、結婚の方を選んだこと)、鳥海が一生を費やして達成しようとする仕事に専念させたいために、自分の作家修業を断ったこと(鳥海の仕事と自分の仕事のどちらを優先させるかで、鳥海の方を選んだこと)、美川きよの生き方は、正に二者択一のそれであった。しかし、きよは、恩師(水上瀧太郎)や作家としての育ての親(小島政二郎)、沢山の友人や知人(今井達夫・中井潤・宮田耕三・宇野千代ほか)、そして誰よりも夫である鳥海青児、との縁に恵まれて、退屈を知らない楽しい人生を送ったのである。

鳥海青児は、油絵具という手段がもつあらゆる可能性をさがして、厚塗りの中から現れてくる形と色を納得いくまで追究した画家である。そういう鳥海にとって「夜のノートルダム」は、30年間にわたって塗られ、なお完成しない、いわば「実験工場」だった。美川によれば、その絵をノコギリで切ったこともあったという。もはや、固有の色で表現できない暗い色彩の重なりの中から現れるノートルダムは、現実の奥にある鳥海の求めてなお到達し得ないアイデアである。鳥海はこういう「おぞき苦闘」を繰り返しながら、画景を押し込め、自分の仕事の方向が誤っていなかったことに満足しつつ逝った。鳥海の志向するところが完成したか否かは問題ではない。人は誰でも永久に中道にしかいないのであるから。油絵「夜のノートルダム」に魅せられて、美川は、鳥海の仕事に殉じて文学を捨てた。鳥海自筆の年譜では、38歳人並に結婚と一行で片づけられている。その果てに彼女が得たものは何であったか。答えるまでもあるまい。

注

- 1) 『現代女性文学辞典』 村松定孝・渡辺澄子編 東京堂出版 1990(平成2)年10月10日発行
- 2) 『夜のノートルダム』 美川きよ著 中央公論社 1978(昭和53)年4月30日初版発行

- 3) 『女流作家』 美川きよ著 「三田文学」 1938 (昭和13) 年1月号から12月号まで、12回にわたって連載。
- 4) 『夜のノートルダム』 13. かぼちゃの頃 P.192~P.193
- 5) 『夜のノートルダム』 21. 眼の章 P.292
- 6) 7) 『夜のノートルダム』 23. 臨終 P.321
- 8) 『夜のノートルダム』 18. 飯倉の家 P.258
- 9) 『日本の原爆文学』10 短篇I ほるぷ出版 1983 (昭和58) 年9月1日初版発行 P.9~P.16
- 10) 『水上瀧太郎』 今井達夫著 フジ出版社 1984 (昭和59) 年5月15日初版発行 P.293
- 11) 『女流作家』 「三田文学」 1938 (昭和13) 年12月号 P.56
- 12) 『夜のノートルダム』 3. 男・女・男 P.41
- 13) 『夜のノートルダム』 5. クリスマスの夜の出来事 P.79
- 14) 『女流作家』 「三田文学」 1938 (昭和13) 年1月号 P.3
- 15) 『女流作家』 「三田文学」 1938 (昭和13) 年2月号 P.201
- 16) 『夜のノートルダム』 18. 飯倉の家 P.261
- 17) 『夜のノートルダム』 23. 臨終 P.321
- 18) 『夜のノートルダム』 4. 裁かれる日 P.62
- 19)20) 『夜のノートルダム』 4. 裁かれる日 P.64
- 21) 『夜のノートルダム』 4. 裁かれる日 P.77
- 22) 『夜のノートルダム』 18. 飯倉の家 P.260
- 23)24) 『夜のノートルダム』 2. 夜のノートルダム P.29
- 25) 『夜のノートルダム』 7. 男鹿半島 P.121
- 26) 『夜のノートルダム』 12. 終戦の夜 P.177~P.178
- 27) 『夜のノートルダム』 12. 終戦の夜 P.177
- 28) 『夜のノートルダム』 20. 私のヨーロッパ旅行 P.280
- 29) 『夜のノートルダム』 22. ありのまま P.308
- 30)31) 『夜のノートルダム』 3. 男・女・男 P.54
- 32) 『夜のノートルダム』 7. 男鹿半島 P.121
- 33) 『夜のノートルダム』 8. 私の中国, 南方旅行 P.131
- 34) 『夜のノートルダム』 17. 長野の雪と小事件 P.240
- 35)36)37) 『夜のノートルダム』 19. 逝く前の年 P.266
- 38)39) 『夜のノートルダム』 16. 杉本寺にて P.218
- 40) 『夜のノートルダム』 17. 長野の雪と小事件 P.240
- 41)42)43) 『夜のノートルダム』 17. 長野の雪と小事件 P.241
- 44) 『夜のノートルダム』 2. 夜のノートルダム P.18
- 45)46) 『夜のノートルダム』 4. 裁かれる日 P.59
- 47) 『夜のノートルダム』 5. クリスマスの夜の出来事 P.81
- 48) 『夜のノートルダム』 5. クリスマスの夜の出来事 P.82
- 49) 『夜のノートルダム』 5. クリスマスの夜の出来事 P.85

- 50) 『夜のノートルダム』 23. 臨終 P.317
- 51) 『夜のノートルダム』 9. 目無経 P.144
- 52) 『夜のノートルダム』 9. 目無経 P.144～145
- 53) 『夜のノートルダム』 1. 霊前祭 P.13
- 54) 『夜のノートルダム』 1. 霊前祭 P.12～13

〔付記〕

本稿を書くに当たり、美川きよ・鳥海青児関係の資料集め、講義、研究方法等等、本学の沖田健吉教授に多大の御尽力を賜りました。ここに記して御礼を申し上げます。